１月２５日（日）主日礼拝レジュメ
「心を見る」　伝道者の書２章１～３節

２章からは、伝道者は快楽を追及してみることにした。1 節「私は心の中で言った」とは、決意を表す。ここで興味深いのは、「しかし、これもまた、なんと空しいことか」と、すぐに結論を語っていること。2 節の「笑い」は表面的な陽気さで、ゲームでの楽しみ、食卓での笑い、そして時には

① エレミヤ書 20 章 7 節「主よ。あなたが私を惑わしたので、私はあなたに惑わされました。あなたは私をつかみ、思いのままにされました。私は一日中**笑いもの**となり、皆が私を嘲ります。」

とあるように「笑いもの」という意味もある。そして「笑いか。私は言う。それは狂気だ。」狂気とは判断力の喪失を意味していて、愚かとも訳される。そして、「快楽か。それがいったい何だろう」と言いますが、快楽は自分の人生にとって何か意味あるものを見出すことはないということ。さらに 3 節では、ある一定期間、笑いや快楽の追求を続けようという思いが彼のうちにはあり、

② 列王記第一 10 章 23 節「ソロモン王は、富と知恵において、地上のどの王よりもまさっていた」

ソロモン王の富をもってすれば、笑いと快楽の追及を納得のいくまで行うことはできただろう。また「知恵によって導かれている」とあるので、ただ単に楽しみにふけって、本来の目的を見失うということは決してないということだろう。

恐らく、多くの方々にとっては違和感があるのではと思う。なぜなら、陽気に笑うということが、自分にとって何か意味があるとは思えないし、何か人生の意味を見出せるとは思えないからだ。快楽は、憂さ晴らし、時間つぶし、何かおもしろいことがないかという中での笑いや楽しみだろう。そこに人生の何かを見出そうなどと考えること自体がおかしいと思う。

そして、ここでぜひ注目すべきは、1節「私は心の中で言った」3節「私は心の中で考えた」ということ。この人は心というものを常に意識していた。私たちは、心を意識し、自分の内側を見つめる時があるか。心が空しいということはないか。笑って楽しんでいる間は、つらい現実や悲しい事実を忘れられても、状況が変わることは決してなく、やはりつらさや悲しみは容赦なく襲ってくる。そのような時に、私たちが見るべきは、また意識すべきなのは、私たちの内側であり、心だ。自分の日常の生活の中で起こる出来事だけではなく、自分の心の中もぜひ見て、心に語りかけ、心の中で考えることを実践していただきたい。聖書のことばを通して私たちは、自分の心の状態を探ることが可能。それは、聖書が神のことばだからだ。

③ ヘブル人への手紙4章12節「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」

聖書のことばを通して自分の心に語ったり、自分の心の状態を見ることもぜひ必要であり、そこから空しい人生を解決する術がある。そしてクリスチャンの方々は、聖書を通して自分の心に語りかける時間を持っているか。笑いや楽しみの追及で人生が終わってしまったということがないよう、ぜひ聖書のことばによって自分の人生を見つめ続け、満たされた人生、また聖書によって人生が変えられた、信仰によって神のみこころを成し遂げたと言える歩みをともに歩んでまいりたい。